
山本光正先生を送る

久留島 浩

歴史研究系の山本光正先生は、当館（以下歴博と略）の設立準備室以来30年の長きにわたって勤務され、いま定年を迎えようとしている。言わば創設以来のメンバーのお一人であり、歴博における先生の軌跡は、良い意味でも悪い意味でも歴博の歴史と重なる。わたしも含めてここ10年くらいの間に入館した世代が多くなるなかで、「昔のこと」をご存じの先生が歴博を去られることは残念で、心細い気もするが、先生の新しい門出をお祝いする言葉を贈ることで、私たち自身が負わなければならない責任をあらためて自覚する機会にしたいと思う。

さて、先生は、1944年7月19日、東京都台東区にお生まれになり、小・中・高と「下町」で成長された。「下町っ子」の気っ風の良さはあるいはここから来るのであろう。1967年、法政大学文学部史学科を卒業後すぐに同大学大学院人文科学研究科日本史学専攻修士課程に進学され、1970年3月に同課程を修了された。修了後すぐに神奈川県企画調査部県史編纂室に嘱託としてお勤めになって、ちょうど始まったばかりの神奈川県史編纂に関わられたのち、1974年に千葉県に奉職され、企画部県民課などで千葉県史編纂に従事されることになった。そして、1980年10月、文化庁文化財保護部管理課国立歴史民俗博物館（仮称）設立準備室に文部技官として採用され、翌年歴博の助手、さらにその翌年助教授に就任された。とくに第一期の近世展示を構築することに努力されたほか、近世史料の収集・整理にあたられ、2007年には教授に昇任された。この間、1999年からは総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史専攻の助教授となり、同時にメディア教育開発センター研究開発部助教授を併任され、院生の指導にも力を注がれた。また、敬愛大学、法政大学で非常勤講師を歴任されたほか、葛飾区文化財保護審議会委員、同区郷土と天文の博物館運営協議会委員、足立区郷土博物館運営協議会委員、千葉県伝統工芸品産業振興協議会委員などの各種委員をお勤めになり、歴博で培われた経験や学識をもって社会的貢献にも尽力された。

先生は、児玉幸多先生の薫陶を受けられ、近世交通史をご専門とされてきた。1969年、卒業論文を『法政史学』21号に「東海道における人馬賃銭について」として発表されたのを皮切りに、ほぼ毎年のように交通史に関わる論文を公表された。その対象は、房総地方を中心とはするが、関東地方の街道あるいは宿や通行に関するもので、およそ研究の対象としていないところがないほど幅広くかつ詳しい。しかも、文献に書かれた場所を実際に歩いてたしかめるという研究方法は、たとえば『房総の道 成田街道』[聚海書林、1987年]からもその一端をうかがうことができる。そして先生は、近年、この40年近くのご研究の成果を、『江戸見物と東京観光』[2005年、臨川書店]、『街道絵図の成立と展開』[2006年、臨川書店]、『東海道の創造力』[2008年、臨川書店]の三冊にまとめられた。以下、この言わば三部作を中心に先生の業績の中身について紹介しよう。

まず、『街道絵図の成立と展開』は、近世に大量に作成される街道絵図についての基礎的な研究

である。交通史研究、近世古地図研究では、先行する研究があるものの、数多くの街道絵図を集め、類型化されたことは貴重な成果である。街道絵図の大衆化を象徴する「道中記」を長年にわたって博搜し、読み込まれただけでなく、実際に踏査されてきた先生だからこそ、このような類型化が可能だったと言えよう。この本でもっとも評価できるところは、街道絵図の写本の系統に関する仮説を提示されたことである。先生は、基準になる街道絵図を、①「東海道路行之図」、②「東海道細見図」・「西海陸細見図」、③「東海道駅路図」・「西海道船路図」、④「東海道分間絵図」および⑤「木曾路・中山道・東海道絵図」・「西国筋海陸絵図」に求め、その比較を行うことによって、後世の写本・刊行本の系統を判断するいくつかの基準を措定されている。比較すべき点として、江戸・東京の描写の有無から、江戸城の描き方のちがいで、さまざまな点をメルクマールとしてあげられており、まさに労作である。叙述のスタイルについては、演繹的あるいは掘り下げた論証方法をとらず、事例・事実のていねいな指摘に留めるといった観はあるが、これも先生の研究・叙述方法の個性に属するものと言えよう。先生のご専門は先に述べたように交通史研究であるが、この分野の研究は、陸上交通に限っても、かつてのように助郷や街道の整備など公的交通の維持とそれに対する民衆の反対運動を対象とする制度史的・民衆運動史的研究から大きく様変わりしつつある。そのなかで、本書を含む先生の近年の研究は、実際に旅をする（した）人の視点から、近世の旅および近代の旅行の持つ歴史的意味を再発見しようという意欲的なものであると位置づけることができ、新たな交通史研究の可能性を予感させるものである。この点では、交通史に限らず近世史研究に寄与するところがあると評価することもできそうである。

『江戸見物と東京観光』は、近世の江戸見物から近代以降の東京観光まで、江戸・東京を訪れる人々がどこを見物（観光）するのかについて、その実態をていねいに追ったものである。近世については、いくつかの旅日記を分析し、共通する見物コースを見事に抽出されている。近代以降は道中日記にあたるものがあまり公開されていないため、案内書を分析することで近世との比較をされている。このなかで、とくに評価できるのは、第一に、江戸見物のコースのなかで、大名小路、大名の登城風景、自分たちの領主の江戸藩邸などがその見物コースに組み込まれていることに注目されたことである（同時に、近代以降も、旧藩主の屋敷へ行かなければという気分があった）。近世の村人たちの江戸見物がどのような意味を持っていたのか、について「領主と農民」という関係から考える際の重要な論点の一つだと言えよう。第二に、「案内人」の存在とその役割を明確にされたことである。これまでも、奈良における「案内人」については研究があったが、それ以外の言わば「観光地」に広く存在していたこと、近代以降は「東京名所案内社」や「東京案内会社」などが設立されていることに注目されたことは評価できる。第三に、江戸以東からの伊勢参りなど西国への旅は、江戸で名所を廻る機会を持ったことなど、意義深い論点を、多くの旅日記を読み込むことで提示されていることである。啓蒙的性格の強い著書ではあるが、先生の長年の旅に関する研究成果を直截に反映しており、今後、「江戸への旅」に関する研究では踏まえらるべきものの一つであると思う。

『東海道の創造力』は、2007年夏の歴博の企画展示「旅から旅行へ」の準備過程で生まれた論点をふくらませるかたちで書かれたもので、展示図録とあわせて読むと、先生の思いが伝わるものである。この企画展示は、先生が歴博で最初に最後に展示プロジェクト代表者として主催されたという点でも特筆に値するものだが、40年にもわたる先生の交通史研究と独自の史料収集の成果を見

せつけたという点で、旅行好き・鉄道好きには堪らない展示となった。この企画展示では、企画展示室を新しくしたばかりで使い勝手がかならずしもよくなかっただけでなく、展示を予定していた史料が著作権の問題をクリアできずに使えないという制約があって、先生も大変苦勞をされていた。しかし、先生が長年にわたって個人的に収集してこられた史料をふんだんに使い、これまでの先生の研究成果を生かして、「旅人の視点」から、「旅の歴史」を展示というかたちで表現しようと努力されたことによって、おおかたの玄人筋の好評を博したことは記憶に新しい。さらに、期間中出勤された日はほぼ毎日、ギャラリートークを行って独特の話術で来館者を楽しませていらっしやったことは、特記すべきであり、会期後半に来館者が増加するという成果につながった。

以上の点は、交通史研究のジャンルに入る研究成果であるが、先生はこのほかに『幕末農民生活誌』という書も著しており、このような近世村落史研究の上での業績をあげられていることは、『近世農民生活史』という名著を著した児玉幸多先生の影響かもしれない。

次に、先生は社会貢献の面でも大きな業績をあげられた。街道や旅を扱った他の博物館での企画(特別)展示に、協力者あるいは図録執筆者として参加される機会がきわめて多かっただけでなく、このテーマでの講演を実にさまざまな機会、さまざまな場所で行なわれた。また、歴博友の会の古文書講座をはじめとして幾多の古文書講座の講師もお勤めになられ、先生の名調子でどれだけ多くの人が古文書を学ぶ楽しさを実感したことであろうか。いずれも、先生が、多くの史料を博搜・解読し、史料に関わる情報について熟知されていることによるもので、近世交通史研究者として対外的に果たされてきた役割には大きいものがある。自治体史編纂でも、『神奈川県史』『富里村史』『市原市史』『柏市史』『下総町史』『天津小湊町史』『大栄町史』『八千代市史』編纂などに深く関わられ、交通に関するご執筆部分はそれこそ先生の独壇場であった。先生の地域史に対する思い、あるいは地域の博物館に対する思いにも篤いものがあり、東京都の足立区・葛飾区では博物館運営協議会委員を長い間にわたって勤められたことがこのことを証明している。

江戸下町育ちの先生の義理がたく一本気な性格は、ときには誤解されかねない言動にもつながったし、少々強面の雰囲気になつきがたさを感じたという人もいなかったわけではないが、実際の先生の素顔は、意外なほどシャイで、その人なつっこい笑顔は一度見ると忘れがたいものであった。また、先生が街道を歩いて、ことあるたびに描かれたデッサンは玄人はだしのできばえであり、川柳など近世文学への造詣の深さと相まって、「現代の文人山本光正」の面目躍如という感じである。先生は、この4、5年間は積極的に館のなかのさまざまな活動に参加され、企画展示の準備とほぼ並行したために多忙をきわめるなか、総合展示第3室(近世)のリニューアルにも関わってくださった。そのなかで、これまでのご自身の研究成果や学識を惜しげもなく示してくださったことは印象に新しい。わたしなどは、最後に先生のこれまでの研究余話や第一期展示の裏話についての話を親しく伺う機会を得ることができたことをありがたく思っている。同時に、先生から渡されたバトンをきちんと次の世代に引き継ぐだけでなく、歴博がこれからどのようなコースをどのようなペースで走るべきか、残った者たちで真剣に考えてみる必要性を痛感した。

先生には、これからきっと新しい学究の場が待っており、まだお若いのだから研究・教育に打ち込まれ続けることになるのだと思うが、そのなかで、先生のデッサンつきの「街道記」(道中記)が刊行されることを心から期待し、はなはだ拙い送る言葉に代えたい。(国立歴史民俗博物館研究部)